

清代の『詩經』圖解について

——前代の繼承と改編——

原 田 信

『詩經』の各詩は詠まれた時代や地域が異なり、それぞれ天文現象や制度、建築、衣冠、祭器、動植物など多様な事物が詠み込まれている。これらの事柄は詩の内容や詠まれた意圖、ひいてはそこから導き出される意義を理解する上で必要な知識であるとされ、歴代の學者は様々な注釋を著した。ところが南宋以降、注釋とともに圖解が編纂され普及する。

『詩經』圖解が普及した理由は、その編纂背景に垣間見える。現存する南宋から明代までの圖解によると、單行本は主に地方の學校の參考資料として編纂されており、附録は「纂圖互註本」や『詩集傳』、『詩經大全』など、學習や科擧受験に用いられる『詩經』のテキストに附されていた。つまり、この時期の『詩經』圖解は、ほぼすべて初學

者や受験者の參照に供するため編纂されたと考えられる。

明代までの『詩經』圖解は學習者の補助教材であったため、その内容は學習上必要な事柄を既成の書物から採録しており、新たな知見を示すことはほとんどなかった。また、圖示する事物は南宋の楊甲「毛詩正變指南圖」や、これを書肆が改編した圖解が明代までそのまま踏襲されていた。諸國の系圖や天文地理、土地や軍事建築といった制度、衣冠、祭器など、歴史、政治、禮に關するものが主となって次第に定型化した。だが、補助教材であるがゆえに、その内容には編纂された時代、地域で廣く行われていた解釋が古い注釋に代わり採録されていたり、そのような解釋の圖が増補されていたりする。こうした教育、學習レベルでの『詩經』解釋の受容と流行の動向を知る上で、

『詩經』圖解は價值ある資料だと言えよう。⁽¹⁾

それでは、清代における『詩經』圖解はどうだろうか。

清代の『詩經』圖解は概ね二種類に分けられる。一つは明代以前の圖解を翻刻、改編した圖解であり、これが大部分を占めている。もう一つはごく僅かに存在する、考證學者や畫家によつて作成された地圖や動植物の圖解など、明代以前にはほとんど見られなかつた圖解である。

清代の『詩經』圖解利用の新たな動向を知る上で、初めて見られる圖解は注目すべき資料である。しかし、これらの圖解が登場した背景を知るには、まずより大きな背景、すなわち大部分を占める『詩經』圖解について理解する必要があると考えられる。そこで、本論では清代に編纂された、明代以前の『詩經』圖解の影響が見られる圖解を主に取り上げ、その編纂と翻刻の経緯から、これらの圖解がそれまでの圖解をどのように繼承し、改編したのかを考察する。

一、明代の勅撰「詩經大全圖」の翻刻と改編

清代でも早い時期の『詩經』圖解は、康熙年間の初期以降に見られる、明の勅撰書『詩經大全』の附録「詩經大全圖」（以下「大全圖」）の翻刻、改編である。以下では、筆者

が調査し得た五種の圖解を取り上げる。⁽²⁾

一一 清代における「詩經大全圖」の翻刻

清の順治年間に明の舊制を踏襲した「科舉條例」が公布された際、『詩經』はそれまで通り朱熹『詩集傳』に依據することとされた。このため、雍正五年に勅撰書『欽定詩經傳說彙纂』が刊刻されるまでは、朱熹『詩集傳』の公的な註釋書であつた明の『詩經大全』が用いられ、その附録「大全圖」も廣く参照されていたと推測される。⁽³⁾ただし、清代に翻刻された「大全圖」は、永樂年間に編纂された勅撰のものやや異なる。

例えば、書肆の唐少村が刊刻した康熙三十五年新刊の徐九一（徐汧）輯『詩經大全』および康熙五十六年新鐫の實際飛（黃越）校訂『重刻詩經大全』は、明代勅撰の「大全圖」と二箇所が異なる。一つは「十五國風地理之圖」に、元代の地名「嶺北省、和金城」が記されていること、そしてもう一つは南宋の楊甲『六經圖』の「毛詩正變指南圖」（以下「指南圖」）に見える「小戎馬式」圖が「俊駟之圖」として補われていることである（表一および圖一を参照）。

明代では官衙や書肆が度々「大全圖」を翻刻したが、こ

の二點の特徴は、明の末期、崇禎年間に編纂された張溥『詩經注疏大全合纂』の「大全圖」に見え、清代の「大全圖」はこれを鰾刻した可能性がある。⁵⁾ 勅撰「大全圖」が國家により編纂された圖解である以上、明代では安易に改編することは憚られたはずだが、末期になるとその權威は既

に搖らいでいたのだろう。勅撰「大全圖」は全國の學宮に頒布されており、清代にも少なからず傳わっていたと考えられるが、清代の書肆が敢えて改編された「大全圖」を採録したのは、明末に起こり始めた「大全圖」改編の氣運を受け継いだのかもしれない。

表一 明代「詩經大全圖」、清代「欽定詩傳圖」収録圖一覽

1 思無邪圖	2 四始圖	3 正變風雅之圖	4 詩有六義之圖	5 十五國風地理之圖
6 靈臺辟離之圖	7 皋門應門圖	8 泮宮圖	9 大東總星之圖	10 七月流火之圖
11 楚丘定之方中圖	12 公劉相陰陽圖	13 豳公七月風化之圖	14 冠服圖(冔/弁/臺笠/緇撮)	15 衣裳圖(袞衣/羔裘豹飾/狐裘/繡裳/芾鞞/邪幅/瑱)
16 佩用之圖(雜佩/觿/鞞/縹/帨/笄/擗)	17 禮器圖(籩/豆/俎/簋/登/爵/罍/彝/犧/尊/壺/柶/卣/鬲/楛/衡/圭/穀璧/蒲璧/圭瓚/璋瓚)	18 樂器圖(琴/笙/黃瑟/簫/管/籥/祝/壎/圉/篪/鐘/磬/鼓/虡)	19 雜器圖(鼎/鬻/錡/釜/罐/升/斗/筐/筥)	20 車制之圖(輪/輻/轂/軛)
21 周元戎圖	22 秦小戎圖	23 兵器服圖(甲/冑/干/戈/戚/揚/殳/矛/弓/虎/韞/矢/魚服/旗/旒/侯/旌/旄/旌/決/拾/鞞)	24 諸國世次圖	25 作詩時世圖

圖一 「小戎馬式」と「棧駟之圖」



一一二 姜文燦『詩經正解』の「深柳堂詩經圖考」(康熙二十三年)

康熙二十三年(一六八四)刊刻の『詩經正解』巻頭には「深柳堂詩經圖考」が附されている。⁽⁷⁾『詩經正解』の編者は封面に姜文燦と吳荃の名が見えるが、圖解は冒頭に「丹陽姜文燦我英氏輯訂」とあり、姜文燦が一人で編纂したもの

である。姜文燦は丹陽の人、字は我英、別業の深柳堂で吳荃などの人士と交流しており、吳荃が編纂した『四書正解』が人氣を博したので、書肆が姜文燦と吳荃の二人に『詩經正解』の編纂を持ちかけたという。⁽⁸⁾

『詩經正解』の序には『詩經大全』の内容に準じて編纂された「畢業書」(科擧の參考書)である顧夢麟の『詩經說

清代の『詩經』圖解について(原田)

約』や『詩經金丹』を整理して完成させたとあり、『詩經正解』も舉業書であろう。このためか、『四庫全書總目』は同書本文の内容には一切言及せず、「深柳堂詩經圖考」について「南宋の『六經圖』や明の馮復京『六家詩名物疏』を踏襲しただけであり、その解釋は極めて淺はかだ」と指摘している。

しかし、この指摘は必ずしも正確ではない。「深柳堂詩經圖考」全九十七圖（表二参照）のうち、『四庫全書總目』が指摘するように南宋『六經圖』の「指南圖」と圖、解説ともに同じなのは4「楚丘揆日景圖」、5「公劉相陰陽圖」、12「清廟闕宮」、68「秦小戎圖」の四圖のみである。11「明堂」は圖こそ「指南圖」のものだが、解説は「指南圖」が引用する『毛詩』や『周禮』の註疏ではなく、『白虎通義』を採録している。

また、7「靈臺」以降の九十一圖は、北宋の聶崇義『三禮圖』からの採録や出典未詳の十四圖を除き、すべて明の「大全圖」の圖である。¹⁰なかでも圖と解説ともに「大全圖」と同じなのは60「矛」、62「虎韞」、64「魚服」、67「周元戎圖」、69「輪」、70「韞」、82「祝」、87「釜」、97「鞞」の九圖であり、その他の圖の解説は「指南圖」や

『毛詩』の註疏、『三禮圖』、朱熹『詩集傳』、『六家詩名物疏』などからの引用である。

さらに、「深柳堂詩經圖考」冒頭の天文三圖は、それまでの『詩經』圖解に見られない。1「天文圖」は明の章瓊『圖書編』の「昊天垂象圖」に類似するが、圖中には「昊天垂象圖」にない「赤道」「黃道」を示す圓を描いている。姜文燦が「昊天垂象圖」を改編したか、他に「赤道」「黃道」を示した圖があり、それを採録した可能性がある。2「月淹日光爲日食之圖」と3「地影蔽月爲月食之圖」は、末尾に錢塘の洪雲來が著した「交食論」という日・月食の原理に関する解説があり、あるいはこの人物が作成したのかもしれない。¹¹

以上のように、「深柳堂詩經圖考」の内容は「大全圖」を主としながら、『詩經』圖解以外の諸書を廣く採録したものであった。その採録基準は「詩經正解」の中に言及がなく明らかなにしがたい。だが、『詩經正解』の凡例には「諸書を參考して採録し、以て多識を廣めしむ」とある。編者の姜文燦が「大全圖」を改編し、より多くの知識を収録した新たな『詩經』圖解を作ろうと意圖していたことは疑いないだろう。

表二 「深柳堂詩經圖考」収録圖一覽

1 天文圖	2 月淹日光爲日 食之圖	3 地影蔽月爲月 食之圖	4 楚丘揆日景圖	5 公劉相陰陽圖	6 輿地全圖內標 十五國都故址	7 靈臺	8 辟雍
9 泉門應們	10 泮宮	11 明堂	12 清廟闕宮	13 罍	14 弁	15 臺笠	16 緇撮
17 袞衣	18 羔裘豹飾	19 狐裘	20 繡裳	21 芾鞞	22 邪幅	23 璜	24 觿
25 雜佩	26 鞞	27 綱	28 祝	29 筭	30 搯	31 籩	32 豆
33 俎	34 簋	35 登	36 爵	37 罍	38 疊	39 几	40 筵
41 琴	42 瑟	43 犧尊	44 壺	45 鬱鬯	46 卣	47 柶黍	48 楅衡
49 圭(桓圭、信 圭、躬圭)	50 璧(穀璧、蒲 璧)	51 圭瓚	52 璋瓚	53 鐘	54 鼓	55 磬	56 笙
57 簫	58 鞞	59 笄	60 矛	61 弓	62 虎鞞	63 矢	64 魚服
65 旗	66 旒	67 周元戎圖	68 秦小戎圖	69 輪・輻	70 鞞	71 軛	72 甲
73 冑	74 干	75 戈	76 戚	77 揚	78 墜	79 管	80 箎
81 圍	82 祝	83 籥	84 鼎	85 鬯	86 錡	87 釜	88 籩
89 升斗	90 筐筥	91 旂	92 旄	93 旌	94 侯	95 決	96 拾

※1は書中に圖の名稱ないため、ここでは假に「天文圖」とした。

一三 趙燦英『詩經集成』の「詩經圖考」(康熙二十六年) 是殿颺、常州の人である。封面の宣傳文や序文によると、康熙二十六年(一六九〇)に完成した『詩經集成』の卷頭には「詩經圖考」が附されている^②。編者は趙燦英、字書肆の依頼により朱熹の新註を主とした『詩經集成』を編

清代の『詩經』圖解について(原田)

纂したという。また、『詩經集成』の凡例には、その編纂において科擧の受験學習に役立つかどうかを重視したことが記されている。¹³『詩經集成』の編纂經過は概ね先述した『詩經正解』と同様であり、同書も「擧業書」として編纂されたものであろう。

「詩經圖考」の内容は先述の「深柳堂詩經圖考」とほぼ同じである。兩圖の違いは「深柳堂詩經圖考」の冒頭にある天文關連の三圖と、6「輿地全圖内標十五國都故址」が削られており、圖の順序が一部異なる點である。

「詩經圖考」の編纂意圖はその凡例に見え、圖解は受験學習に必ずしも役立つわけではないが舊來の書物にあることから収録したこと、そして古今共通の事物の圖は削り、異なる事物は失傳する可能性があるため収録したことの二點が挙げられている。¹⁴

「詩經圖考」はその名稱と内容から、明らかに「深柳堂詩經圖考」を改編した圖解である。改編を行った理由は不明確であり、特に古今で共通するという理由で地圖や天文圖を削ったことは、讀者が参照する上で必要性があったとは考え難い。編者の趙燦英は圖解が「受験學習に役立つとは限らない」とし、収録についても「舊來の書物にも附さ

れている」という消極的な理由を挙げていることからすれば、「詩經圖考」における改編は『詩經』の學習や解釋とは別の要因、例えば刊刻費用の削減のような、經濟的な側面から行われたのではないかと推測される。

一四 高朝璣『詩經體註圖考』（康熙五十年）

康熙五十年（一七一）には『詩經體註圖考』が編纂された。¹⁵編者の高朝璣は自序に「錢塘學人」とある以外、その經歷は不詳である。¹⁶この圖解の編纂經過は先述した『詩經正解』や『詩經集成』とよく似ている。自序によると、高朝璣は『詩經體註圖考』完成の前年、書肆の要望に応じて『四書融註』を編纂しており、續けて「五經」註釋書の編纂を始め、まず『詩經』から着手したという。

『詩經體註圖考』は上部に各詩の概要と主旨、下部に詩の本文および朱熹の新註を載せる體裁をとっており、また高朝璣が自序の中で同書を「帖括の資」と稱していることから、先の『詩經正解』や『詩經集成』と同じ擧業書である。

本圖解は全八十七圖を収録し、すべて圖のみで解説はない（表三参照）。圖はほぼすべて「大全圖」からの採録である。「棧駟」圖が見えることから、清代翻刻の「大全圖」

※13、34、52、65は書中に圖の名稱が無いため「大全圖」に見える同じ圖の名稱を記した。

81 管	82 鼎	83 泮	84 楅衡	85 犧尊	86 貝	87 視濯視牲 圖	88 祝	89 圉	90 簫
71 圭(桓圭、信圭、躬圭)	72 壺	73 桓	74 鬯	75 卣	76 鞞	77 磬	78 戚	79 揚	80 相陰陽
61 璋瓚	62 靈臺	63 辟雍	64 登	65 罍	66 干	67 戈	68 緇	69 擗	70 圭瓚
51 篋	52 大東總星 圖	53 俎	54 鞞	55 芾	56 邪幅	57 臺笠	58 緇擗	59 皋門應門	60 圭瓚
41 豆	42 袞衣	43 笙	44 魚服	45 旒	46 旒	47 元戎	48 決	49 拾	50 墳
31 小戎(輅、輶等)	32 伐駟	33 虎韞	34 甲	35 簋	36 籜	37 鬻	38 流火	39 纒	40 籩
21 弁	22 璧(殺璧、蒲璧)	23 觶	24 鞞	25 笈	26 首矛	27 雜佩	28 侯	29 輻	30 輪
11 輓	12 籥	13 爵	14 筭	15 璜	16 掃	17 定中揆日 圖	18 旒	19 旗	20 旌
地理圖	2 琴	3 瑟	4 鐘	5 鼓	6 壘	7 篚	8 宮	9 錡	10 釜
1 十五國風									

表三 『詩經體注圖考』収録圖一覽

と同じく明末の『詩經注疏大全合纂』のものである。末尾の「視濯視牲圖」のみは北宋の楊復『儀禮圖』に見える圖である。

内容面について言えば、『詩經體注圖考』は「大全圖」に「視濯視牲圖」を補っただけであり、先述した「深柳堂詩經圖考」のような大幅な改編は見られない。むしろその

特徴は、上圖下文の形式で本文中に圖を示したことにあ
る。これは、小説などでは古くより見られるが、『詩經』
の圖解では『詩經體註圖考』までほぼ見られない體裁であ
る。

それまでの『詩經』圖解は、南宋の「指南圖」や『毛詩
圖說』、元代の『六經圖碑』といった一部の單行本や石碑
を除き、大部分は『詩經』テキストの卷頭に附された參考
資料であった。ところが、高朝璣は圖も「經書の内容を採
究するための手がかり」であり、圖を附すことで「むやみ
に受験學習の參考書を提供するのではない」と述べてお
り、おそらくこのために圖を『詩經』本文のなかに組み
込んだのであろう。

『詩經體註圖考』が學業書の體裁をとる以上、編纂者が
本心から圖解を經學探究の材料と考えていたのかはやや疑
わしい。しかし、長期にわたって改編を重ね、次第に形式
的な附録となっていた『詩經』圖解が『詩經』本文と容
易に對照できる、より實用的な形式に改められたことは、
『詩經』圖解の利用を考える上で少なからぬ意義のある變
化であった。

一―五 勅撰『欽定詩經傳說彙纂』の「欽定詩傳圖」(雍 正五年)

清代に唯一編纂された勅撰の『詩經』圖解は、雍正五年
(一七二七)に完成した『欽定詩經傳說彙纂』の附録「詩傳
圖」(以下「欽定詩傳圖」)である(表一参照)。「欽定詩經傳
說彙纂」の凡例は「欽定詩傳圖」の編纂過程に言及して
いない。しかし、内容の同一性、そして解説の典故として
「胡廣詩經大全」が散見されることから、本圖解は明の
「大全圖」を底本にしたと考えられる。

「欽定詩傳圖」の圖は、5「十五國風地理之圖」の一部
が清代の地名に改められている以外、すべて「大全圖」の
ものである。一方、解説は大幅に改訂されている。「大全
圖」の解説が主に朱熹やその學統に連なる宋元の學者の
『詩經』解釋しか示していないのに對し、「欽定詩傳圖」は
漢唐の解釋も多く採録している。^⑮この改編は、朱熹『詩
集傳』を主として、漢から明までの有益な解釋は採録する
という、「欽定詩經傳說彙纂」全體の編纂方針により行わ
れたものであった。^⑯

「欽定詩傳圖」が刊刻されて以後、康熙年間初頭より見
られた「大全圖」の鰾刻や、「大全圖」を主體とした『詩

『詩經』圖解の編纂はほとんど行われなくなる。これは、公的に参照することが定められた「欽定詩傳圖」が世に廣まったからであろう。また、以下で述べる宋元『詩經』圖解の改編や校勘では「欽定詩傳圖」が主要な材料の一つとなっており、「欽定詩傳圖」は清代における『詩經』圖解のなかでも依據すべき資料として重視され、他の圖解の内容に少なからぬ影響を與えたことが窺われる。

二、宋元『詩經』圖解の翻刻と改編

これまで筆者が調査し得た清代翻刻の宋元『詩經』圖解は六種、このうち南宋の「指南圖」の翻刻は一種、その他はすべて元代『六經圖碑』の「詩經圖」の翻刻である。

二― 江爲龍『朱子六經圖』の「詩經圖」(康熙四十八年)

清代の宋元『詩經』圖解の翻刻本のなかでも早期のものは、康熙四十八年(一七〇九)に完成した江爲龍『朱子六經圖』の「詩經圖」である。²⁰ 翻刻者の江爲龍は桐城の人、康熙三十九年の進士で宜春知縣、吏部主事などを歴任した。²¹

本圖解の底本は、葉涵雲の序に「信州類宮(州學)に置かれた石碑」とある。これは、現在まで伝わっている元代

の『六經圖碑』のことである。翻刻の經緯や動機は葉涵雲や江爲龍の序に見える。これによると、江爲龍は幼い時より經書を學び、疑義があれば廣く諸書を調べ考證しており、いずれその成果を書物にしようとしていた。しかし、科擧の學習に追われ、役人になると職務に追われ、その念願を果たすことはできなかった。この状況のなかで康熙四十七年、官舎を訪ねてきた周子用より朱熹が編纂したという『六經圖碑』を贈られた。江爲龍はこの圖が經書の原義を探究する手がかりになると考え、また流傳が少ないことを鑑み、圖の順序を整え、さらに四書圖を加えて十六卷とし翻刻したという。²²

このように、江爲龍が『六經圖碑』の翻刻に至ったのは經書の考證を重視したからであった。そしてもう一つ翻刻の動機として重要なのは、江爲龍や葉涵雲が『六經圖碑』を朱熹の編纂物とし、宋から明に至る經書圖解の原點と考えていたことである。²³ 実際には朱熹が『六經圖』を編纂した記録はなく、『六經圖碑』も元代に建立されたものである。²⁴

清の周中孚は、江爲龍が『六經圖碑』に四書圖を加え、意圖的に「朱子」の名を書名に冠したとする。²⁵ しかし、

江爲龍の自序を見る限り、江爲龍は周子用より贈られた圖が『朱子六經圖』と言われるもので、これを整理校勘した上で四書の圖解を採録したと述べており、意圖的ではないようである。おそらく『六經圖碑』の編纂者が朱熹だという風説があり、江爲龍もそれを疑わなかったのだろう。江爲龍の考えの正否はともかく、その鵜刻は朱熹の學問を繼承し、經書考證の資とするために行われたものであった。

二二二 潘案鼎『六經圖考』の「毛詩正變指南圖」(康熙

六十一年)

康熙六十一年(一七三二)に刊刻された潘案鼎『六經圖考』は、南宋の楊甲『六經圖』の鵜刻である。²⁸⁾ 楊甲の『六經圖』は、明代では萬曆年間に吳繼仕など複数の人物により鵜刻されているが、清代では本圖解が数少ない例の一つである。

潘案鼎は溧陽の人、康熙四十八年の進士、江夏知縣を務めた人物である。²⁹⁾ 『六經圖考』の自序に記された鵜刻意圖によると、かつて流傳の少なかった『六經圖』を明の「計部大夫汝南方公」が鵜刻したが、この版は大きく閱覽や攜帶に不便なため小型の版に改めてと²⁸⁾いう。この小型化に

より、『六經圖考』の「指南圖」は原圖の内容のうち「詩篇名」や「作詩時世」、そして草木蟲魚などの名稱を一覽化した「釋名」など、「譜(表)」に相當する部分がすべて削除されている。

圖解の小型化が企圖されたことは、當時の人々のなかに、經書の學習や考證において圖解をより身近に利用しようとする需要があつたことを示している。

二二三 常定遠鵜刻『六經全圖』の「詩經圖」(雍正元年)

雍正元年(一七三三)には、襄城の太學生である常定遠が『六經全圖』を刊行した。²⁹⁾ これも元代『六經圖碑』の鵜刻である。自序によると、常定遠は康熙六十年、陽翟で古書を賣る者から『六經圖』六卷を購い、若い時に學んだ經學を思い出し、また流傳の少ない「信州石本」や「廬江木本」を廣めることが世の經學研鑽の一助になると考へ鵜刻したと³⁰⁾いう。「信州石本」は元の『六經圖碑』の拓本、「廬江木本」は明の萬曆四十二年、廬江の章達・盧謙が『六經圖碑』を鵜刻した『五經圖』六卷のことである。常定遠が購入した『六經圖』は卷數が記されていることから『五經圖』だろう。

『六經全圖』の各序には、當時の人々の『六經圖碑』に對する認識が示されている。例えば牟欽元の序には「漢宋以來、學者は經書を考訂し、その成果を右に刻み傳えたが、現存するのは鵝湖書院の石刻だけである」や「六經の坊本は『六經圖碑』を篇首に附すが、簡略で物事の本末を推し測ることができない」とあり、萬邦榮の序には「先に南宋楊甲の『六經圖』があつたが、これは『文獻通考』に記載がない。『六經圖』と明の『五經圖』を比べると、圖の順序や内容の多くが異なるが、その理由は明らかではない。(『五經圖』の底本である『六經圖碑』は)あるいは元、明の間に編纂されたものかもしれない」とある。³¹⁾

これらの認識は、先述した『朱子六經圖』の編者などが『六經圖碑』を朱熹の手になるものと信じていたのとは随分隔たりがある。古書や鐫刻本の流通を通じて、當時の人々は南宋の『六經圖』や元代の『六經圖碑』、坊本の圖解との間に存在する異同に氣づき、圖解の來歴にも注意を向け始めたのである。

二一四 盧雲英『五經圖』の『詩經圖』(雍正二年)

『六經全圖』完成の翌年、盧雲英が『五經圖』を鐫刻し

た。盧雲英は前項で言及した『五經圖』の鐫刻者盧謙の孫である。同書の楊恢基「重刻五經圖序」によると、盧雲英は『五經圖』の流傳が少ないことを惜しみ、學習者の參考に資するため家藏の『五經圖』を王暉なる人物に校訂させて鐫刻した。王暉の「重刻五經圖凡例」には、『五經圖』と『六經圖碑』を對照して縮尺や圖の收録順序を校訂したこと、南宋の『六經圖』以來刊刻された經書の圖解と『六經圖碑』とが異なること、そして編者の姓名が傳わらない『六經圖碑』はおそらく一人の手になるものではないという見解が述べられている。

盧雲英の『五經圖』鐫刻は、前項で述べた常定遠の『六經全圖』とは全く別に行われたものだが、どちらの序にも『六經圖碑』の由來に關する疑義や、『六經圖碑』と他の圖解との差異が指摘されている。このような認識の廣まりは、その後行われる經書圖解の考證、校勘の重要な契機であつたと考えられる。

二一五 王暉『六經圖定本』の『詩經』圖解(乾隆五年)

乾隆五年(一七四〇)には王暉が『六經圖定本』を編纂した。³²⁾ 王暉は前項の盧雲英『五經圖』に同姓同名の校訂

者が見えるが、同一人物なのか明らかではない。

『六經圖定本』は南宋の『六經圖』と元の『六經圖碑』を折衷した圖解である。王暉の自序には元の『六經圖碑』、南宋『六經圖』の最も古い鏤刻である明の吳繼仕本とその後まもなく鏤刻された郭若維本、既述した清代の江爲龍本や潘宗鼎本といった諸本を對照して圖解の遺漏や省略を發見したため、南宋の『六經圖』を主とし、『六經圖碑』を副として後學のために校勘を試みたという。さらに、各經の末尾には「參訂」や「御書改正」という校勘説明があり、『詩經』圖解の箇所では「欽定詩經傳說彙纂」の「詩傳圖」と、吳繼仕本や坊本との異同を記している。

王暉の編纂意圖は、異同の多い經書圖解の傳來狀況や諸版本を調べ、「欽定詩傳圖」も含めて校勘を行い、「正確」な圖解を世に示すことにあつた。前項までに述べように、常定遠や盧雲英の『六經圖碑』鏤刻ではすでに圖解の來歴や圖解間の差異が認識されていたが、王暉の『六經圖定本』編纂に至って、この認識は『詩經』圖解の考證、校勘へと結實したのである。

二一六 鄭之僑『六經圖』の『詩經』圖解(乾隆八年)

乾隆八年(一七四三)に編纂された『六經圖』の編者は鄭之僑、字は東里、乾隆二年の進士であり、鉛山知縣や寶慶府知府を歴任したという。³³⁾ 鄭之僑が『六經圖』を編纂した意圖は、その自序や雷鉞の序にみえる。鄭之僑は鉛山知縣の時、諸生に經書を講義し、諸生がよく理解できない際は『六經圖碑』の拓本を示した。しかし、『六經圖碑』には誤りが多かったため諸説を集めて校訂した。そして校訂本を諸生に示したところ、初學者に役立つということ³⁴⁾で刊刻するよう願われたという。

鄭之僑『六經圖』の序や凡例には校訂の詳細が記されていない。『詩經』の圖解を見る限り、鄭之僑は主に『六經圖碑』を參照したようだが、南宋の「指南圖」にある「清廟閔宮圖」や既述した「深柳堂詩經圖考」の日食・月食に關する圖解が収録されている。また、『六經圖碑』には圖に對應する解説が無いが、鄭之僑『六經圖』は大部分の解説を「欽定詩傳圖」から採録しており、なかには服虔、陳祥道、呂祖謙、王應麟など「欽定詩傳圖」には見えない人々の説を補っている箇所もある。

鄭之僑の『六經圖』は、『詩經』圖解を校訂しようとし

た點では先の王暉『六經圖定本』と類似している。しかし、清代の天文圖解や諸家の解説を補うなど、その編纂は『六經圖碑』の校訂よりも増補や改編と言ったほうが適切である。鄭之僑は『六經圖碑』をもとに、初學者が多様な知識を得られる圖解の作成を試みたのだろう。

二一七 楊魁植編・楊文源增訂『九經圖』の「詩經圖」 (乾隆三十七年)

『九經圖』は楊魁植が編纂し、その子楊文源が増訂した圖解である。³⁵⁾『九經圖』にある複数の序によると、楊魁植の字は輝斗、號は乾齋、漳州長泰の人、孝友方正に推薦されるも赴かず、生涯生員であった。³⁶⁾楊魁植は藏書家で多くの圖譜を所藏しており、そのなかに世にほとんど傳わらない元代の『六經圖碑』があった。楊魁植は學生が受験學習に努力するほど見聞を狭めていることを憂い、『六經圖碑』をもとに『九經圖』を編纂した。しかし、楊魁植は『九經圖』の原稿を残して没したため、その子の楊文源が原稿を増訂し刊刻した。³⁷⁾

『九經圖』の「詩經圖」の内容は概ね『六經圖碑』のものである。「四始圖」、「公劉相陰陽圖」、「周元戎圖」の三

圖は『六經圖碑』に見えない朱熹や嚴粲の説を引用し、また末尾に「作詩時世圖」が補われているが、これらはいずれも「欽定詩傳圖」と同じである。このほか、編者により補われたのは鳥獸などの一覽表に見える名稱の總數と、「毛詩小序之圖」の「詩大序」のみである。このように、「詩經圖」は『六經圖碑』の不足をほぼすべて「欽定詩傳圖」より補った圖解であった。

『九經圖』の編者楊父子が「欽定詩傳圖」以外の圖解や諸家の説を採らなかつた原因の一つは、『六經圖碑』をも古い圖解と考えていたからである。『九經圖』の「凡例」には「『六經圖碑』と南宋『六經圖』の明代吳繼仕翻刻本とを比べると、後者には缺けている内容が多い」とある。³⁸⁾楊父子は元代の『六經圖碑』が改編されて南宋の『六經圖』となり、これが明代に翻刻される過程で多くの内容が失われたと考えたのであろう。『六經圖碑』の元の姿を傳えていない以上、學習の標準とされた「欽定詩傳圖」以外の圖解は、参照する必要が無かつたのである。

そしてもう一つの原因は、『九經圖』の主要な編纂目的が科擧試験對策だつたことにある。『九經圖』に寄せられた諸氏の序には、先述した「學生が受験學習に努力するほ

ど見聞を狭めている」のように、圖解が經書の解釋に役立つ見聞を廣めるといった編纂意義を擧げているが、編者の楊文源の序には「近頃の科擧は秋に開催され、策問にはしばしば圖學が出題されることから、父が苦心探究して『九經圖』を編纂したことを思う」と記されている³⁹。

以上二つの理由から、『九經圖』は「欽定詩傳圖」以外の内容を加えることがなかったようである。『九經圖』の「凡例」は南宋の『六經圖』のほか、歴代經書の坊本に圖解が附されていたことにも言及している。『九經圖』の編者は他の經書圖解の存在を知らなかったわけではなく、科擧受験に不要な圖や解説を意圖的に取り上げなかったのである⁴⁰。

三、徐鼎『毛詩名物圖說』（乾隆三十六年） における既成の『詩經』圖解の影響

乾隆三十六年（一七七二）に編纂された徐鼎の『毛詩名物圖說』は、宋代以降に中國で編纂された『詩經』圖解としてはほぼ唯一動植物の圖を描いており、經書の註疏、小學、本草など諸書の記載を附している⁴¹。同書の序によると、徐鼎は字を實夫、號を雪樵といい、畫家として知られた人物

である。自宅で學問を教授し、巡撫の幕下で講義を行っており、沈德潛と面識があったらしい。徐鼎は年少の時分、兄に『毛詩』を教授されて名物を知ることの重要性に気づき、書肆を往來すること二十年、諸書の記載を集めたが書物の上の學問だけでは「格致多識の學」を脩めるのに不足を感じ、山川をめぐって民間の情報を集め、動植物の圖を描いたという⁴²。

『毛詩名物圖說』には動植物以外の圖解は収録されていないが、その自序には「動植物以外の禮樂、冠裳、車旂の圖は後に刊行する」と記されている。現存する同書の稿本によると、當初、徐鼎は動植物と「禮樂、冠裳、車旂」などの圖解をまとめて編纂しようとしていたようで、稿本の目次（表四参照）全十卷のうち、卷七以下には禮樂、衣冠、天文地理の圖の項目が見える。これらはすべて宋元以來の『詩經』圖解に収録されている事物である。

稿本は破損箇所が多いが、僅かに「關雎圖」と「七月流火圖」の二圖が残っている。「七月流火圖」は南宋の書肆が編纂した『詩經』圖解に収録されて以來、元、明、清三代の圖解に見える。このため、徐鼎がどの時代の『詩經』圖解によって禮樂等の圖の作成を構想したかは明らかにし

表四 徐鼎『毛詩名物圖說』稿本の目次

卷一、鳥	■三、■草「中」	■草「中」・ ■「下」	■木 ■「木下」	卷七、禮器・樂器
卷八「九魚」、雜 器・兵器	■九、冠服・衣裳・ 佩用	■十、車制・元戎圖・小戎圖・靈臺圖・辟離圖・皋門應門圖・泮宮圖・定星圖・流火圖・大東總星圖・ 公劉相陰陽圖・豳風七月風化圖・十五國風地理圖	■「下」	上

※■は破損箇所、「」内は朱筆の追加・修正。

がたいが、當時の人物がまず参照するとすれば「欽定詩傳圖」だったのでないかと推測される。

また、稿本には「七月流火圖」、「辟離圖」、「泮宮圖」三圖の解説も残っている。これらは明清の「大全圖」や「欽定詩傳圖」に似るがかなり増補されており、引用書名を明示している『玉海』のほか、『文獻通考』の記載と思われる箇所もある。

結果として、徐鼎が禮樂等の圖解を完成させたかどうか明らかではない。しかし、この稿本の内容からは、少なくとも徐鼎が宋元以来の『詩經』圖解に基づき、さらに大幅に改編しようとしていたことが窺われる。

四、清末・民國初期の坊本と圖解

清代中後期には、これまで述べてきた諸圖解のほかにも

清代の『詩經』圖解について（原田）

様々な圖解が散見される。例えば道光十九年（一八三九）の毛應觀『經圖匯考』や同治三年（一八六四）の尹繼美『詩地理攷略』の「詩地理圖」は、編者が作成した新たな圖解を多く収録するが、ごく一部に「欽定詩傳圖」から節略したらしき圖解もある⁴³。また、同治十年（一八七二）の方玉潤『詩經原始』は、「三代の制作」について後人の圖は必ずしも眞を傳えるとは限らないとの考えから、萬古不變の存在として考證可能な天文地理などの圖を「欽定詩傳圖」から採録し、さらに「思無邪太極圖」という、それまでの『詩經』圖解には見られなかった圖を採録している⁴⁴。この時期、『詩經』の考證を目的とした新たな圖解の編纂では、主に「欽定詩傳圖」が参照されたようである。

この後、宣統年間から民國初頭にかけて『詩經』圖解が多く編纂されており、そのほとんどは書肆の刊行した『詩

『經』テキストの附録である。この種のテキストは『監本詩經』や『御纂詩義折中』など公的なテキストを思わせる書名であり、本文は確かに『欽定詩經傳說匯纂』や乾隆年間の勅撰『御纂詩義折中』だが、圖解は「欽定詩傳圖」と異なる。また、書名に「繪圖」とあっても圖解がない、あるいは書名に圖解となくとも圖解が附されているなど混亂が見られる。⁽⁴⁵⁾以下では筆者が調査したなかでも特徴的な圖解を三種とりあげる。

表五 『章福記監本詩經』収録圖一覽

1 靈臺之圖	2 辟廱之圖	3 皋門應門之圖	4 泮宮之圖	5 周元戎圖	6 秦小戎圖	7 罍	8 弁(淇澳)
9 嘉筮(都人士)	10 緇撮(都人士)	11 袞衣(九罭)	12 羔裘豹飾(鄭羔裘)	13 繡裳(九罭)	14 狐裘(檜羔裘)	15 芾屨(侯人/菜菽)	16 瑱(君子偕老)
17 邪幅(草菽)	18 雜佩	19 鴈(芄蘭)	20 笄(君子偕老)	21 縞(東山)	22 鞞(芄蘭)	23 幌(野有死麇)	24 ■(君子偕老)
25 籩(伐柯)	26 豆(伐柯)	27 俎(楚茨)	28 罍(行葦)	29 登(生民)	30 簋(權輿)	31 爵(簡兮)	32 壺(韓奕)
33 疊(卷耳)	34 柜(江漢)	35 卣(江漢)	36 犧尊(閟宮)	37 栒衡(閟宮)	38 鬯(江漢)	39 圭(雲漢) 桓圭/信圭/躬圭	40 圭瓚(早麓)
41 升斗(椒聊)	42 筐(采蘋)	43 壁(雲漢) 穀壁/蒲壁	44 璋瓚(棫樸)	45 罐(宛邱)	46 筥(采蘋)		

※網掛けは、解説が「欽定詩傳圖」と同じか類似した項目。

四一 章福記刊行『監本詩經』(宣統三年)

章福記の刊行した『監本詩經』の巻頭には、建築、車馬、衣冠、器物に關する四十六の圖解が附されている(表五参照⁽⁴⁶⁾)。このうち、衣冠・器物の圖の冒頭には「冠服、樂器などの圖は、原碑(『六經圖碑』)に註釋がないため、大全(『大全圖』)から補った」という註記がある。圖のほうは確かに『六經圖碑』と同じだが、三十二圖の解説は「欽定詩傳圖」とほぼ同じ内容である。「欽定詩傳圖」と異なる一部の解説は「大全圖」の解説や、漢唐の註疏、明の

『六家詩名物疏』などから節録したらしいもの、典據不明のものがある。

本圖解は註記にある出典と實際の内容が一致せず、解説の採録にも一貫性が無いことから、書肆は明確な編纂意圖をもたず既成の圖解を適當に採録したのかもしれない。しかし、その内容からは、すでに科擧が廢止された清代末期に至っても『六經圖碑』や「欽定詩傳圖」が參照されていたことが窺われる。

四―二 小安樂書屋『御纂繪圖詩義折中』(宣統三年)

『御纂繪圖詩義折中』は乾隆勅撰『御纂詩義折中』に圖を附したものである。全一九四圖、圖の解説はなく、「十五國風地理之圖」が目次の後に附されている以外、圖はすべて本文中に置かれている。

同書は前項の章福記『監本詩經』と同年に刊行されたものだが、圖解の内容は相當異なる。本圖解の圖の大部分を占める一四八圖は、天明四年(一七八四)日本の岡元鳳が編纂した『毛詩品物圖考』の動植物圖である。残りの四十六圖は天文地理、禮樂器物などであり、宋元以來の『詩經』圖解と共通する圖である。内容はほぼ「欽定詩經圖」

圖二 『御纂繪圖詩義折中』の「絲衣」圖



や前述の『監本詩經』と同じでだが、これまでの『詩經』圖解には見えない「絲衣」圖があり、清代の正装が圖示されている(圖二)。

圖解を本文中に組み込む改編は本論で既述した高朝環『詩經體註圖考』に先例があり、より實用的に圖解を讀者に提示することを意圖したのだろう。また、岡元鳳『毛詩品物圖考』は、早くは光緒十二年に上海の積山書局が刊行しており、宣統二年には上海の鑄記書局が『詩經』に『毛詩品物圖考』を附している。『御纂繪圖詩義折中』はおそらくすでに刊行されていた『毛詩品物圖考』が好評を博していたなどの理由で收録したのだろう。

四―三 上海天寶書局『監本詩經』の圖解(民國七年)

上海天寶書局『監本詩經』の卷頭にある全四十九圖のう

ち、唯一、宋元の『詩經』圖解と共通するのは冒頭の「十五國風地理之圖」⁽⁴⁹⁾ だけであり、四十八圖は岡元鳳『毛詩品物圖考』の圖である。「十五國風地理之圖」には元代の地名が見えており、『六經圖碑』の「詩經圖」か清代の「大全圖」から採録したらしい。

この『監本詩經』の圖解が動植物のみを採録し、禮樂、器物に關する圖を削除した點は、先の『御纂繪圖詩義折中』と同様、『詩經』學習の變化を考える上で一つの手がかりとなる事象である。そして、もう一つ見逃してならないのは、本書が『詩經』圖解の變遷の最後に位置する資料だということである。本書以後、圖解を附した『詩經』のテキスト自體がほとんど刊行されなくなる。南宋以來、改編を重ねながら編纂されてきた附録としての『詩經』圖解が清朝の終焉とともに姿を消していったことは、それが王朝下での教育制度や學習内容と強く結びついていたことの證左である。

おわりに

本論で考察した個々の圖解の編纂狀況から、清代の『詩經』圖解編纂の動向は概ね四つの時期に分けられる。まずは明代以來參照された「大全圖」を醵刻、改編した時期

(康熙初年から末年)、次はより古い宋元『詩經』圖解に着目し醵刻、改編した時期(康熙中期から乾隆中期)、そして動物や地理を専ら收録する新たな圖解が編纂され始めた時期(乾隆中期から同治年間)、最後は動植物の圖解『毛詩品物圖考』が廣まり、宋元以來の『詩經』圖解の内容が次第に失われた時期(清末から民國初期)である。

それでは、以上の編纂動向のなかで清代の『詩經』圖解は何を繼承し、改編したのだろうか。この問題は、解説と圖とでは異なる狀況を呈している。

まず解説では、明代にはほとんど見られなかった改編が行われた。その典型例は「欽定詩傳圖」である。これは明確な目的、すなわち朱熹の『詩集傳』を主として漢唐の注疏などを折中し『詩經』解釋の標準を示すために、明の「大全圖」の解説のみを大幅に増補したものであった。また「欽定詩傳圖」の前後に刊刻された圖解の解説も、學習者に多様な知識を提供する、他の圖解と差別化し營利を圖る、學習の標準を示すなどと推測される目的から、それまでの『詩經』圖解には収録されていなかった解釋を引用したり、「欽定詩傳圖」の解説を取り入れたりした。一方、圖に描かれた事物が改められることはなかった。清代の大

部分の圖は南宋「指南圖」、元代「六經圖碑」の「詩經圖」、明代「大全圖」のいずれかのものである。

解説と圖の改編が對照的な状況であつたことには、一つの要因が推測される。それは根拠が明確であつたか否か、ということである。

解説について言えば、多くの清代『詩經』圖解の底本となつた宋、元、明の圖解の解説には概ね明確な根拠があつた。南宋の「指南圖」は漢唐の注疏、明代の「大全圖」は朱熹『詩集傳』や『朱子語類』を主に採録している。元代「六經圖碑」の「詩經圖」に解説はほとんどないが、ごく一部に朱熹や張載、王安石などの解説が見える。いずれにしても誰の唱えた説か明らかである以上、解説を改編するかどうかは『詩經』の解釋、學習の流行や編纂者の見解に左右されるだろう。

これに對して、明代以前の圖の多くは根拠が不明であつた。南宋の「指南圖」は「作詩時世」に歐陽脩輯『鄭氏詩譜』が、「齊國風摯壺氏圖」に呂才や燕肅の漏刻圖を典拠として擧げる以外、他の圖は編者の楊甲が自身で作成したのか、あるいは他書から採録したのか明らかではない。また元代「六經圖碑」の「詩經圖」や、明代「大全圖」の原

圖である羅復、劉瑾の圖などは、いずれも「指南圖」とこれを南宋の書肆が改編した圖解をもとに、元代の編者がさらに改編、増補を加えたと推測される。⁵⁰圖は、宋から元に至る過程で無名の人物や書肆により改編を重ねたことで、誰がいつ、何を根拠にどのような意圖で作成したのか、その由來は一層不明確になっていった。

このように根拠が不明な圖に對して、清代には古の學者が作成し、長期に渡つて傳來したものとすることで、むしろ保存や参照の價値が認められた。例えば「欽定詩傳圖」の編者は圖解收録の意圖を「詩に圖有り譜有り。譜は以て諸國の世次を臚ねて其の時代を考う。圖は以て三代以上制作の舊を存す。古人の左圖右書は、其の遺意なり。今略ぼ之を存す」と述べており、古くより傳つた圖譜は古人の見解を反映していることから保存し、参照に供しようと考えていたことが窺われる。また、宋元『詩經』圖解の改編では、圖解の間に存在する違いが指摘されることはあつても、結局「三代の舊を存する」ものとして圖を改めることはなかつた。⁵²宋元以來の『詩經』圖は、根拠が不明であつたことでそのまま傳えられ、『詩經』の學習や解釋に影響を與えたのである。

ところで、根拠が不明だからといってすべての圖が一貫して保存、参照されたのではない。この點について、本論で既述した康熙年間の趙燦英「詩經圖考」と同治年間の方玉潤「詩經原始」の編纂態度の違いは對極をなしている。趙燦英は古今共通の事物である天文地理の圖を削り、衣冠や器物など清代當時の風俗とは異なる事物の失傳を憂慮して収録したが、方玉潤は後人の圖が必ずしも「三代の制作」の實際の形狀を伝えるものではないと疑い、萬古不變で考證可能な天文地理などの圖のみを収録した。この方玉潤の考え方は、清代になつて初めて見られる新たな『詩經』圖解の内容とあい通じるものがある。康熙年間の姜文燦「深柳堂詩經圖考」における日月食の圖や、乾隆中期以降の尹繼美「詩地理圖」や徐鼎、岡元鳳の動植物圖などは、いずれも方玉潤のいう萬古不變で考證可能な事物に相當する。

すでに失われた事物を根拠の不明な圖に求めるのか、あるいは根拠を求めることが可能な事物を圖に依據して考證するのか、この認識の轉換こそ、清代になり新たな『詩經』圖解の編纂が廣まり、宋元以來の圖解が失われていった契機だったのではないかと考えられる。

注

- (1) 明以前の「詩經」圖解の變遷經過について、筆者は論文「『詩經』圖解本の變遷・宋から明初まで」（早稻田大學中國文學會編『中國文學研究』第三十八期）および「詩經大全圖」と「詩傳圖」―明清期の勅撰「詩經」圖解について―（同三十九期）に記した。
- (2) これ以外にも、康熙中後期の書肆鄒聖脈が編纂した「御案詩經備旨」巻頭には地圖「詩十五國圖」があり、「北和」という地名が見える。これは元代「六經圖碑」や清代「大全圖」の「嶺北省今和林城」を誤つて収録したらしい。清代における「大全圖」の影響を考える上では多少の意義はあると思われるが、地圖だけでは編纂意圖を考察しがたいため、本論では取り上げなかった。
- (3) 註釋一の論文「詩經大全圖」と「詩傳圖」を参照。
- (4) ともに刊刻者は「興賢堂書鋪唐少村」、内閣文庫所藏。
- (5) 「四庫全書存目叢書」収録の北京大學圖書館藏本による。
- (6) 明の盧謙、章達翻刻「五經圖」の萬曆四十二年李維楨序に「國家頒五經大全、學宮皆有圖」とある。
- (7) 本論では北京大學圖書館藏本及び「四庫全書存目叢書」所收本を用いた。
- (8) 「詩經正解」葛筠の序および「四庫全書總目」卷十八「詩經正解」による。
- (9) 「四庫全書總目」「詩經正解」條には「大抵襲六經圖及名物疏諸書而爲之。其訓釋亦頗淺易」とある。

- (10) 『三禮圖』からの採録が明らかなのは39「几」、40「筵」、49「圭」、50「璧」の五圖、出典未詳の圖は37「罍」、38「壘」、43「犧尊」、44「壺」、46「缶」、58「鞞」、84「鼎」、95「決」、96「拾」の九圖である。
- (11) 洪雲來は『乾隆福建通志』卷二十七「職官八・大田縣」に「錢塘人。監生」と見える。
- (12) 復旦大學圖書館藏高燮舊藏本を用いた。
- (13) 『四庫全書總目』卷十八『詩經集成』條もその體裁を「大旨爲揣摩場屋之用」としている。
- (14) 凡例には「余聞詩中有畫、描情繪景正在有意無意之間、非特形象而已也。況舉業所尚、惟取考核詳明、證據確實、豈云畫中有詩哉。獨是古本所傳亦有談及圖繪者、列之篇端、以供博覽、未爲不可然」とある。
- (15) 北京大學圖書館所藏の道光十四年范紫登校訂『詩經體注圖考大全』を用いた。このほかにも同治五年本『五經體注大全』、文德堂本、書業德同治九年本などがある。
- (16) 高朝璽は他にも『古文新知』(尊經閣文庫所藏)などを編纂している。『詩經體注圖考』の校正者に門人の氏名が複数見られ、私塾で學問を教授していたのかもしれない。
- (17) 自序には「一間列圖考、便於省覽。亦欲爲窮經之藉、非徒沾沾供帖括資也」とある。
- (18) 註釋一の論文「『詩經大全圖』と『詩傳圖』」を参照。
- (19) 『欽定詩經傳說彙纂』凡例には「今標以(朱子)爲宗、而自漢迄明諸儒先之解詁、采其義理精當有裨經旨者、錄在朱傳之
- 後爲集說。其文義小殊、彼此相備者爲折其中。或二說各成其是、則別爲附錄、用資參考」とある。
- (20) 『四庫全書存目叢書』所收の南京圖書館藏康熙刻本を用いた。
- (21) 江爲龍の經歷は『四庫全書總目』や『鄭堂讀書記』卷二「朱子六經圖」條、『光緒重脩安徽通志』卷一百八十などにみえ、李驎「虬峰文集」卷十六「筠圃江先生傳」(江爲龍の父の傳)にもやや言及がある。
- (22) 江爲龍の幼少期からの學習と考證については、自序に「余自成童以來、每遇經書疑義、輒博覽考核以求其故、必使瞭然胸中。而後已幾欲廣搜備攷、匯爲成書、以告來學。乃始束縛於貼括家言、已而挾策走四方、通籍後復映掌於簿書。歲月悠忽、虛願莫酬」とあり、『朱子六經圖』入手の經過は「(康熙)戊子小春、豫章廣之永豐周生子用爲余乙酉分校所得士、過從宜陽官舍、攜朱子六經圖以贈。披閱之下見其繪象圖形、窮原竟委、凡經學之淵源繁曠、莫不燦如指掌」とある。また、饒刻に際して順序を整えたことは葉涵雲の序に「圖舊勒石於信州類宮、以摹印維難致。其傳不廣、且碑碣參伍位置錯綜、加以裝潢家割裂倒亂、不便觀覽。余同表兄硯崖江先生彙次成帙、條分縷析、因類屬編、更益以四書圖、共得十六卷」とある。
- (23) 葉涵雲の序に「但向時墨刻、自宋迄明、石凡數易、點畫磨滅、魯魚亥豕、寧無沿誤」とある。
- (24) 元の盧天祥が信州の學校に『六經圖碑』を建立したことは、『大明一統志』卷五十一「廣信府」條に見える。
- (25) 周中孚『鄭堂讀書記』卷二「朱子六經圖」には「此本徒以

附入四書圖之故、冠以朱子二字、究屬非是。故提要本刪之也」
とある。

(26) 北京大學圖書館藏本を用いた。

(27) 清の『江南通志』卷一二四、『陝西通志』卷二三、『湖廣通志』卷二十五などに見える。

(28) 自序には「其書（明代繅刻の『六經圖』）長尺有五、廣二尺餘、若置諸几之小者則溢出於外、攜以遊則行篋、不能容：今又以書之弗良於讀也、斂其式、以便於人」とある。

(29) 本論では京都大學文學部圖書館所藏の道光十一年張洪範刻本および北京中國國家圖書館所藏の道光二十五年汪根敬刻本によつた。雍正元年の初刻本は未見。

(30) 自序には「康熙辛丑歲、陽翟有鬻故書者、購得六經圖六卷。展視之、回憶少時所受茫如墜煙霧者」や「信州石本、廬江木本流布絕少、鏤而行之、誠窮經者之一助也」とある。

(31) 牟欽元の序には「漢宋以來、諸儒考訂詳明、刻石使傳于世也。維是鵝湖書院遺跡雖存、歲久模糊、殘缺失次。六經坊本摘附篇首、又復簡略、不可端倪」とあり、萬邦榮の序には「〔文獻通考〕雖其他遺漏尚多、然使先有所謂六經圖者似所宜錄、而未嘗紀載何與、且予曾假信州石本與此對校、而前後參錯、多所不同、其故亦未詳也。〔六經圖碑〕或疑作於元明之間」とある。

(32) 『四庫全書存目叢書』所收の北京中國國家圖書館藏乾隆五年刻本を用いた。

(33) 『四庫全書總目』卷七十七「鄭之僑鵝湖講學會編十二卷」條

に經歷が見える。

(34) 鄭之僑の序には「諸生若信若疑、問出所藏六經圖……披閱梗概、編次工密、位置井然。先儒表章聖經、厥功鉅哉。迺細按、其奇偶之分、日星之度……以迄鳥獸草木之名、舛錯頗多。不知者竟以雜僞誣其真本」や「爰公餘挑燈按規求矩、手自摹畫。於碑碣之訛者正之、其殘缺者補之、參益諸儒集說。歷數寒暑而圖成。以質諸生、諸生以爲裨於初學、請付開雕」とある。

(35) 『四庫全書存目叢書』所收の南京圖書館藏乾隆三十七年刻本を用いた。

(36) 劉希周には「朝廷開孝友方正之科、大吏廉其名以薦、卒以孝養不赴徵」や「先生以名諸生、久困場屋、顧不屑屑舉子業」とある。「孝友方正之科」は『清史稿』卷一百九「選舉志」にある「孝廉方正科」のことだろう。また、羅鶴齡の序には「秦庠名士」とある。

(37) 陳夢得の序には「楊公輝斗篤學嗜古、家中縹緗萬卷、而古刻圖譜尤多。其所藏六經圖、信州真本也」や「公常念畢業之家所好、雖篤而每苦其無力。是以多隘於見聞。因願纂輯諸圖、專刻成書」とあり、陳士誠の序には「家藏六經圖真本世罕有傳、特以代久年湮、不無殘缺。先生加意補苴、參以諸家論說、又折中于御纂諸經、集爲九經圖。未脫稿而實志以歿」、劉希周の序には「積歲窮經、并留意于圖考。收錄是書、以信州圖爲本、其間闕失、補以先儒之說。于御纂諸經所有者、則恪遵焉」とある。

(38) 凡例には「信州石本每經分上下卷、凡十二鉅幅、不載編輯

姓氏。自宋楊氏鼎卿（楊甲）苗氏昌言序刻之後、明吳氏繼仕重刻、已多殘缺」とある。

(39) 楊文源の序には「楊魁植）又編輯經圖、尚未脫稿。展讀之下、每用愴然。因近科秋開、策問屢以圖學課士、伏念先人揣摩攻苦、纂集成書、精神爲憊」とある。

(40) 北京中國國家圖書館所藏の乾隆三十六年刻本を用いた。

(41) 畫家としての活動は、馮金伯『墨香居畫識』卷六や蔣寶齡『墨林今話』卷四に見える。また、徐鼎の自序には「余丁束髮時、兄授以毛詩三百篇、輒遇耳目間見之物、欣然有所得。乃欲博考名物、搜羅典籍、往來書肆不憚煩、不揆禱味、編而輯之、閱二十年矣。尤恐於格致多識之說、未精詳也。凡鈞叟、郵農、樵夫、獵戶、下至輿臺早隸、有所聞必加試驗而後圖寫」とある。

(42) 北京中國國家圖書館所藏稿本を用いた。

(43) 北京大學圖書館所藏の道光十九年刻『經圖匯考』と同治三年刻『詩地理攷略』を用いた。

(44) 『續修四庫全書』所收本を用いた。『詩經原始』凡例には「詩原有圖有譜、二者均不可廢。但三代制作去今已遠、後人以意仿圖、未必即肖。唯山川封域萬古不易、建置雖多、尚可尋而討得：唯制度名物諸圖、則在所畧」とある。

(45) 筆者が調査した『監本詩經』のうち、清末の京都正興德記、光緒九年京都寶書堂、民國二年鑄記書局、民國七年上海天寶書局、民國十年文成堂刊行のものには圖がない。また、民國初期の上海廣益書局『五彩繪圖監本詩經』は「繪圖」と稱す

るが圖解はない。以上はいずれも北京大學圖書館所藏である。

(46) 北京大學圖書館藏本を用いた。

(47) 共通する四十六の圖は「十五國風地理之圖」「琴・瑟・鼓・鐘」「罍」「筐・筥・錡・釜」「籥・爵」「箝」「瑱・象・拂」「定中揆日圖」「旄・旗」「戛」「矛」「雜佩」「輪輻」「小戎」「虎韞・伐駟」「甲」「裳」「簋」「籩」「簠」「流火」「襜」「籩・笥」「衾衣・繡裳」「旒・旗」「白旆・元戎」「拾・決」「壘・簠」「大東圖（無圖名）」「俎」「芾・邪幅」「臺笠・緇撮」「皋門應門」「靈臺・辟廱」「鼙鼓」「豆・登」「干・戈・戚・揚」「相陰陽」「桓圭・信圭・躬圭」「壺」「卣・柶・鬯」「鼓・柷・簫・磬・圜・箎」「旂」「旒」「絲衣」「泮宮」「楅衡・犧尊・貝冑」である。

(48) 「絲衣」圖は南宋書肆刊刻『纂圖互註毛詩』の「毛詩舉要圖」にも見えるが、この書は後世流傳が極めて少なかった。

(49) 北京大學圖書館藏本を用いた。

(50) 本論注釋一に挙げた筆者論文による。

(51) 『欽定詩經纂說彙纂』凡例による。

(52) 例えば王皓の「六經圖定本自序」には「凡依舊本編錄者、或有圖無注、或圖詳注略、或圖注兩有舛錯」とあるが、「舛錯」は舊本（明の吳繼仕翻刻『六經圖』）と『六經圖碑』と比較した違いを指しており、圖そのものの誤りを指摘する記述はない。また、鄭之僑『六經圖』凡例には「車服禮器：舊圖有合者摹之、有闕者補之、總以存三代以上之舊」とあり、他の諸經についても圖を補ったという記載しかない。他の宋元『詩經』圖解の翻刻、改編本についても同様である。

※本稿は平成二十五～二十七年度科研費若手研究（B）「17世紀以降の日中における『詩經』圖解の展開に關する研究」（研究課題番號：2570137）及び平成二十八年度科研費若手研究（B）「日本の『詩經』圖解における特色の形成に關する研究」（研究課題番號：15K21527）の成果の一部である。

* * *

作者：原田 信

Author: HARADA Makoto

標題：關於清代《詩經》圖解的分析——以其繼承及改編前代圖解之情況為主

編前代圖解之情況為主

Title: The Illustration of *Shi jing* [詩經] in the Days of Qing Dynasty — its Process of Succession and Revision —

摘要：自南宋楊甲編纂《毛詩正變指南圖》以來，《詩經》

圖解作為一種輔導資料，在民間廣泛普及，並由一些學者和書坊反復改編，直到明代。然而，由於明朝頒布的敕撰《詩經大全圖》佔據了主要地位，因而明代《詩經》圖解的改編處於停滯狀態。本文根據此情況，分析清代《詩經》圖解繼承或改編前代《詩經》圖解的情況及其原因。

分析結果指出，清代各期《詩經》圖解的編纂、翻刻情況明顯不同，可分為四個階段。而且，其間清人對圖解的重視度發生了變化。筆者認為，這個認識的變化即是清代新的《詩經》圖解編纂活動興起，而宋元以來《詩經》圖解逐漸消失的契機。

關鍵詞：清代經學 詩經圖解 學習 科舉 考證學